

## 牧口常三郎著『人生地理学』中国語版に関する一考察

高橋 強

### 目次

1. 序
2. 『江蘇師範講義 地理 第7編』
  - 2-1. 「奥付」「序」「目次」
  - 2-2. 同書出版の背景
3. 『最新人生地理学』
  - 3-1. 「奥付」「序」「目次」
  - 3-2. 同書出版の背景
4. 清末における『人生地理学』
5. 結び

### 1. 序

2000年4月上海古籍出版社から鄒振環著『清末中国における西洋地理学——1815年から1911年に至るまでの西洋地理学訳著の伝播と影響を中心に』（原文では鄒振環著『晚清西方地理学在中国——以1815至1911年西方地理学訳著的伝播与影響为中心』）という学術書が出版された。

同書の「第3章」「第7節 近代西洋地理学思想と知識体系の輸入およびその影響」において、「人文地理学は人生地理学とも称し、人地の関係理論を基礎として、各種の人文現象の分布や変化や拡散、及び人類社会活動の空間構造を探究する近代科学である。中国では古来、人地の関係に対し種々の論点があったが、系統的な人文地理学の著作はなく、西洋では地理学は地球を人類の古里として研究してきた。」「その中で清末に比較的影響があった概論的な人文地理学の著作が3種類あった。1冊目は、1906年に南京寧属学務処、蘇属学務処出版の『人生地理学』である。同書は日本人牧口常三郎の著作で、江蘇師範生が翻訳編集したもので、『江蘇師範講義 地理 第7編』という形をとり、全5編からなり地球、気界、陸界、水界、人類及び産業地理を論じている。艾素珍は同書は、中国で最も早く「人生地理学」と命名された著作であると認識している。2冊目は、1907年上海群益

書局が再版した世界語言文字研究会編集部訳の『最新人生地理学』で、全3遍34章からなり、緒言において人地の関係に力を入れて探究している。」「3冊目は凌庭輝の著作『人生地理学』で、全26章からなり、前半27章は人文地理に関係する各種自然現象を論述し、後半9章は各種人文地理の知識を紹介している。同書「総論」では著者は人生地理学の原理及びその研究方法を全面的に論述している。」<sup>(1)</sup>と述べている。

ここにおいて牧口の『人生地理学』中国語版の存在が、文献上証明されたことになった。『人生地理学』は1903年10月に第1版が出版されたので、その3年後に中国語版が出版されたことになり、かなり速く翻訳本が出たことになる。『最新人生地理学』は原著者の名前は挙げられていないが、『清末中国における西洋地理学』が紹介している同書内容の概説、即ち目次構成や語彙等から牧口の『人生地理学』の翻訳であると思われる。この点については、東京都立大学大学院院生の松田大作氏によって検証されている。従って、清末中国の人文地理学の分野で影響力のあった著作3種類の内、2種類までが牧口の『人生地理学』ということになる。

2001年11月、蘇州大学図書館で『最新人生地理学』が発見され、そのコピー資料を入手した。その後、本学「創価教育研究センター」と湖南師範大学「池田大作研究所」との共同研究（仮称）「『人生地理学』と中国」の一環として、2002年2月1日から4日にかけて、同研究所副所長冉毅教授と共に、浙江省立図書館にて『江蘇師範講義 地理 第7編』と『最新人生地理学』を、上海図書館、復旦大学図書館では『最新人生地理学』を閲覧する機会を得た。更に『清末中国における西洋地理学』の著者である復旦大学の鄒振環教授と懇談する機会も得ることが出来た。

本稿は、上記調査を整理、分析しながら、『人生地理学』中国語版出版の背景や同中国語版がもたらした影響等の考察を試みようとするものである。

## 2. 『江蘇師範講義 地理 第7編』

### 2-1. 「奥付」「序」「目次」

「奥付」には次のような記載がある。

光緒32年3月25日印刷

光緒32年4月1日発行 全部16册定価大洋6元

編集者 江蘇師範生

発行所 江蘇寧属学務処

江蘇蘇属学務処

印刷人 日本東京浅草黒船町 榎本邦信

印刷所 日本東京浅草黒船町 東京並木活版所

光情32年は1906年のことである。発行所は中国であるが、印刷所は日本ということなので、日本で印刷・製本し、中国で発売されたものである。同書は128頁からなっており、その後に5枚の地図が付されている。

目次の後に次のような「序」がある。

## 人生地理学

### 日本牧口常三郎講義

地理学は三類に分けられる。一、数理地理学、また天文地理学とも言う。二、自然地理学、また地文地理学とも言う。三、人生地理学、また人文地理学とも言う。この科目は専ら地人の相関関係の理を発見し明らかにする。講師 牧口先生の著書には専門書がある。根拠が甚だ正確である。その中での論議も多く豊かである。(本書は) 編集し要約を選んだものである。以て教科書の用に備える。もし全貌を見たいと欲するならば、先生の原著『人生地理学』があるので、参考にする事ができる。

「目次」は以下の通りである。

## 緒論

### 第1編 地球

#### 第1章 地球の形状

#### 第2章 地球の形状と人生の関係

1. 円筒平写法

2. 円錐直写法

3. 直写法

4. 平写法

5. 三角測量法

#### 第3章 地球の運動

1. 地球の自動

2. 地球の公転

#### 第4章 地球の表面

### 第1節 陸界の区別

1. 水陸の関係

2. 形状

3. 地勢の高低

### 第2節 水界の区別

1. 水陸の関係

2. 全面の動静

3. 陸よりの距離

## 第2編 気界

### 第1章 大気及び空気

#### 第2章 気温

1. 適温

2. 高温

- 3. 低温
  - 第3章 等温線
    - 第1節 等温線の測量法
      - 1. 一日に必要とする平均温度
      - 2. 一月に必要とする平均温度
      - 3. 一年に必要とする平均温度
    - 第2節 世界等温線の分布
      - 1. 緯度の高低
      - 2. 海岸と内陸の距離
      - 3. 海流
      - 4. 地勢
      - 5. 風位
      - 6. 山脈の方向
      - 7. 土質の燥湿
    - 第3節 気温の規則的变化
      - 一日の変化
      - 一年間の変化
  - 第4章 空気の流動
    - 第1節 風と人生の関係
      - 1. 間接
      - 2. 直接
    - 第2節 風の種類
      - 1. 貿易風
      - 2. 季節風
      - 3. 海軟風および陸軟風
  - 第5章 空気の圧力
  - 第6章 湿気および降水
    - 1. 水界の循環
    - 2. 大気の飽和
    - 3. 湿気と人生の関係
    - 4. 雨
- 第3編 陸界

- 第1章 平原
  - 第1節 平原と人生
  - 第2節 平原の種類
    - (甲) 高原
    - (乙) 低原
- 第2章 山嶽
  - 第1節 概念の要素
    - (甲) 高度および傾度
    - (乙) 各部
      - 1. 高度と人生
      - 2. 高度と植物
      - 3. 高度と水原
      - 4. 傾度と人生
      - 5. 砲車牽引の限界
      - 6. 人間の登攀の限度
  - 第2節 山脈と鉱産
    - 1. 山の集合
    - 2. 山脈の方向
    - 3. 山脈の成因
    - 4. 鉱産の種類
  - 第3節 歴史上山嶽の影響
    - 1. 人民の氣勢の雄々しさ
    - 2. 封建の起源
    - 3. 偉人の修養地
    - 4. 古代風俗の陳列所
- 第3章 島
  - 第1節 島国の特質
    - 1. 独立の思想
    - 2. 進取の気性
    - 3. 愛国心の発達
    - 4. 気候の完全さ
  - 第2節 島の種類

- |   |   |
|---|---|
| <p>(甲) 陸島<br/>(乙) 洋島<br/>陸島の成因<br/>1. 海水の衝撃<br/>2. 陥落<br/>3. 沖積<br/>陸島の特質<br/>1. 国境の強固さ<br/>2. 国際交渉の処は安静の地位<br/>  におく<br/>洋島の成因<br/>1. 火山の噴出<br/>2. 珊瑚の遺骸<br/>洋島の特質<br/>1. 船艦往来の貯炭所、貯水避難所<br/>2. 燐鉱および羽毛の採集<br/>3. 遠洋漁業の中心地<br/>4. 海底電線の中継所<br/>5. 潜水事業の根拠地<br/>第3節 島の位置<br/>  (甲) 近海島<br/>  (乙) 遠洋島<br/>1. 物類上の区別<br/>2. 人事上の区別<br/>  (甲) 河<br/>  (乙) 湖島<br/>第4節 世界の重要な島<br/>1. 商務上に関するもの<br/>2. 軍事上に関するもの<br/>第4章 半島<br/>  第1節 半島の成因およびその</p> | <p>分布<br/>第2節 半島と文化の関係<br/>1. 文化の起源<br/>2. 文化の伝達<br/>第5章 地峡<br/>第4編 水界<br/>  第1章 海洋<br/>    第1節 海洋と商業の関係<br/>    第2節 海洋と人生の関係<br/>    第3節 海流の系統<br/>    第4節 海洋の深度<br/>    第5節 海洋の面積<br/>  第2章 港湾<br/>    第1節 港湾の要素およびその<br/>      人工補強<br/>      1. 陸岸の周囲<br/>      2. 港口<br/>      3. 深度<br/>      4. 質底<br/>      5. 面積<br/>      6. 気候の位置<br/>      7. 貿易の位置<br/>      8. 陸による地形<br/>    第2節 港湾の種類<br/>      1. 避難港<br/>      2. 漁港<br/>      3. 軍港<br/>      4. 商港<br/>    第3節 港湾の成因<br/>      1. 火口港<br/>      2. 陥落港<br/>      3. 河口港</p> |
|---|---|

- 4. 潟港
- 5. 氷河港
- 6. 海水侵蝕港
- 7. 珊瑚礁港
- 8. 人造港
- 第3章 河川
  - 第1節 河の三要素
  - 第2節 河流の速度
  - 第3節 河の方向
    - 1. 横河の利益と縦河との比較
    - 2. 横河の種類
    - 3. 縦河の位置
  - 第4節 河の部分
    - 1. 上流と人生の関係
    - 2. 中流と人生の関係
    - 3. 下流と人生の関係
    - 4. 河口
    - 5. 水源
  - 第5節 河流と文明の関係
- 第4章 湖沼
  - 1. 流入があって出流がないもの

- 2. 出流があって流入がないもの
- 3. 流入も出流もあるもの
- 第5編 人類および産業地理
  - 第1章 人類
    - 第1節 人の形体と精神
    - 第2節 人種と人類の階級
  - 第2章 産業地理
    - 第1節 生産
      - 1. 生産の要素
      - 2. 生産の意義
      - 3. 生産の種類
      - 4. 生産の発達
    - 第2節 生産地
      - 1. 原始的産業と土地の関係
        - (1) 農業と土地
        - (2) 産業の位置
      - 2. 枝分かれした産業と気候の関係
        - (1) 商業と地理
        - (2) 製造工業地

目次構成は、計5編21章からなっており、『人生地理学』初版本と比較すると、13章少ない。初版本での第1編「人類の生活処としての地」第2章「地球」を第1編に配列し突出させ、同本第2編「地人相関の媒介としての自然」第15章「気界」を第2編に配列し、その上で地球表面の「陸界」を第3編に、同表面の「水界」を第4編に、同「地人相関の媒介としての自然」第19章「人類」と、同本第3編「地球を舞台としての人類生活現象」第23、第24章「産業地理論」を第5編に各々配列している。

この配列は、牧口独自の考え方なのか、或いは受講者である江蘇師範生の需要に沿ったものなのかは不明である。「人類の生活処としての地」に力点が置かれ、自然地理の内容が殆どを占めるが、「人生との関係」を述べた項目が10箇所あり、やはり牧口の「人生地理学」を貫いた内容である。但し第1編第2章の1から5までは、測量製図理論に関する

もので、『人生地理学』初版本には無い内容なのである。当時清末の学者は、伝統的な測量製図方法と西洋の測量製図理論を結合させ、新しい測量製図理論と方法を作り上げようと試みていた。<sup>(2)</sup>それを踏まえ、牧口が特に紹介したのか、または受講生の要望を取り入れた結果なのだろうか。

## 2-2. 同書出版の背景

同書の出版は、「序」にもあるように、牧口の講義を受講した江蘇師範生が、牧口の『人生地理学』を編集し要約を選んでなされたものである。牧口は1904年2月から1907年4月まで、弘文学院（1902年～1909年）で地理学を担当していた。同学院の留学生は卒業の際、各講師の講義ノートを持ち寄って一つにまとめ印刷し、帰国後、それを使用して教授したりしていた、<sup>(3)</sup>と言われるので、同書の内容には教室で新たに追加された講義内容も反映される。前述した如く、同書第2章の1から5の内容は、『人生地理学』には触れられていない内容である。同学院のクラス編成は出身地別（方言の差が大であるので）で行われていた。従って、牧口が地理学の講義をした江蘇省出身の師範生が出版したものであろう。

同書の印刷年月日は1906年3月25日、発行は同年4月1日となっている。同学院の特徴の一つに、速成科中心（就学期間、1年、8ヶ月、6ヶ月）の課程があげられる。速成課程は1906年以降廃止されるが、1902年から1907年まで速成科卒業者が93%で、その内8割が師範関係の修了者であったことから、<sup>(4)</sup>同書の出版は、1905年に入学してきた江蘇師範生によるものであると考えられる。

1905年は、清朝政府が日本をモデルにして教育近代化の努力を本格的に推進する年となった。それは、日露戦争における日本の勝利が契機となっていた。同年、清朝政府が1300年の長きにわたり存続してきた科挙制度を廃止し、近代学校教育普及のため、日本の文部省の制度にならって学部を創設した。<sup>(5)</sup>

教育改革については、1901年から取り組みがなされていた。義和団事件（1900年）以後、西太后は内外大臣および各省督撫に対して改革案の提出を命令、それをうけて多くの上奏がなされるが、いずれも変法には興学育材が不可欠だとして、大胆な教育改革を実施するよう提言していた。それらのなかでもっとも影響力のあったのは、両江総督劉坤一および湖広総督張之洞が共同で三回にわたり提案した「会奏変法自強三疏」、なかでもその第一疏であった。そこで彼らはもっぱら教育改革について論じ、次のような具体策を建議するのである。

(1) 文武学堂の設置 — 小・中学堂から専門学堂、武備学堂、大学学堂にいたる近代

学校教育を系統的に導入し、学堂の卒業生を科挙試験合格者に準じて優遇する。

(2) 科挙制度の改革 — 八股文による試験をやめ、試験内容を時務策など実際的なものに改めるとともに、科挙合格者の数を漸次削減し、それを学堂出身者からの官吏登用に切り替えていく。武科挙は即時廃止する。

(3) 海外留学の奨励 — 学堂の早急な設立は困難なので、そのかわりに海外留学、ことに日本留学を奨励し、留学帰国者には科挙出身と同等の資格を授与する。また私費留学も官費留学と同じ待遇をする。

これらのうち、彼らが特に重点施策として実施するよう提唱したのが日本への留学生派遣であった。日本留学は、欧米への留学にくらべて経費が3分の1ですむうえ、速成教育の効果が期待でき、ことに師範生中心に派遣すれば、帰国後彼らをただちに小・中学堂の教師にあてることができ、教育普及に役立つと考えたからである。<sup>(6)</sup>

同書の発行所が「江蘇寧属学務処」「江蘇蘇属学務処」となっているのも、同書は寧(南京の別称)属の師範学堂や蘇(蘇州)属の師範学堂で使用されていたものと思われる。なお学務処とは、教育の先進地域では、すでに1902～3年頃から各省の学務を統括する機関として開設されていた。江蘇省では、1902年に両江総督になった張之洞が「江蘇教育改革構想」を明らかにし、南京に学務処を設け、これに江蘇地区と江寧地区からなる全省の学務を統括させていた。学務処の中には教科用図書や参考図書の収集、翻訳を管掌する翻訳科もあった。<sup>(7)</sup>

同書が出版された頃、蘇州には江蘇師範学堂が、南京には両江師範学堂等があった。江蘇師範学堂は、羅振玉と藤田豊八がそれぞれ監督および総教習に就任して1904年12月に発足した。まず小学堂教員の養成を目的に修業期間6ヶ月の講習科と同1年半の速成科の2科を開設、教科書類は日本の教育書を編纂して利用した。当初、学生数は講習科40名、速成科120名であったが、その後修業期間3ヶ月の体操専修科の学生も入学、200名にふえている。1905年6月、江蘇学務処は江蘇師範学堂の改組昇格を計画、まず初級師範簡易科を開設して入学者の募集をおこなった。当時はすでに清朝政府が科挙を廃止して学堂教育を重視する方針を明確に打ち出していたことから、新教育ブームとなり、募集人員80名に対し700名をこえる志願者が殺到し、入学が許可されていない女子が男装して受験するほどの熱狂ぶりだったという。学部発行の『第一次教育統計図表 光緒33年分』によれば、1907年度の同校在籍者数は、優級師範選科34名、同専修科85名、初級師範完全科154名、同簡易科133名とあり、改組が順調に進行しつつあったことがわかる。<sup>(8)</sup>

両江師範学堂は、もとは三江師範学堂として1904年11月に正式に開校した。三江師範学堂は張之洞が、江蘇省教育改革の第一着手として南京に開設した華中最大の教員養成機関

で、江蘇・江西・安徽三省の教員養成を目的とするものであった。開校にあたり、東亜同文書院教頭の菊池謙二郎を総教習に迎えた。開校時、選抜試験により学生300名を収容、これを①1年速成科、②2年速成科、③3年本科、の3コースに分けて授業を開始した。1905年に安徽省が独自に師範学堂を設立し、同学堂が江蘇・江西両省の運営となったのにもとない、名称変更されたが、その後、段階的に改組事業がすすめられ、それまでの速成科中心の師範学堂から正規の初級師範学堂、さらには優級師範学堂に昇格させていった。1907年度の学部統計によれば、同学堂は教職員73名、学生数は優級師範完全科273名、同選科230名、および初級師範完全科32名の合計535名とある。<sup>(9)</sup>

同書は教科書として使用されたが、中国初の全国統一の教科書は1907年春に編纂された『初小国文教科書』で、学部は1906年3月に教科書審定制度を設け準備を開始した。従って『江蘇師範講義』編纂は教科書統一前のものであるが、江蘇省の各学堂の教科書が混乱していた状況を考えると、質量を統一したという点で注目に値する。

1906年、1907年、多くの留日卒業生が帰国し始めた。これらの専門的訓練を受けた師範生は、各学堂において、学生に対し新知識や新思想をもたらしたばかりでなく、学校に対する良好な校風の形成にも直接の影響を与え、学校の教学運営上、質量共に向上させた。彼らが教授する科目は、留学期間に学んだ専門科目で、教授内容も方法も新鮮で、教材や教具がない場合には、彼ら自身で編集し、動植物の標本がない場合には、学生を指導し一緒に製作し、学んだ最も新しい知識を学生に伝授していた。更には、教師たちの実際の言動も学生に大きな影響を与えた。<sup>(10)</sup>

### 3. 『最新人生地理学』

#### 3-1. 「奥付」「序」「目次」

「奥付」には次のような記載がある。

光緒33年6月20日印刷

同 年7月初5日発行

最新人生地理学

定価大洋2元5角

訳述者 膠州湾火車站旁144号

世界語言文字研究会編集部

発行者 上海派克路勝業里蒋字698号

游芸社

発行所 上海福州路惠福里

群益書局

発売所 各大書坊

印刷者 日本東京牛込区神楽町1丁目2番地

榎本邦信

印刷所 日本東京牛込区神楽町1丁目2番地

翔鸞社井上印刷工場

なお『同書』は再版もされている。再版本には、以下の記載がある。

光緒33年10月初1日再版印刷

同 年10月 15日再版発行

光緒33年とは1907年のことである。上記記載からすると印刷・製本は日本で、発売は中国である。同じ年に再版が発行されたということは、同書はかなり好評であったと考えられる。同書は588頁に及んでいる。

なお「奥付」の部分で、浙江省立図書館での1冊、上海図書館での3冊、復旦大学図書館での1冊、及び蘇州大学図書館のコピー資料と比較すると、以下のような相違が見られる。

1. 「光緒33年6月20日印刷  
同 年7月初5日発行」と、

「光緒33年10月初1日再版印刷  
同 年10月 15日再版発行」の2種類がある。

前者は、浙江省立図書館、上海図書館の内1冊、復旦大学図書館、蘇州大学図書館の計4冊で、後者は、上海図書館の内2冊であった。

2. 「特価2元」と新たに押印が認められるのは、再版本の上海図書館の2冊と、初版本の蘇州大学図書館の計3冊であった。
3. 発行所と発売所の間に「総発行所上海 英四馬路 游芸図書館」という押印が認められるのは、上海図書館の3冊、復旦大学図書館の計4冊であった。なお押印の色は、初版本は朱色で、再版本は青色であった。

「序」

太古以来、地球表面の液体は凝固して岩石となり、何千億万年を経て細胞が生まれ、また何千億万年を経て軟体類、獸類が生まれ、それから数万年を過ぎやっとな人類が誕生した。人類は地球上で最も高度な生物で、生存に最も適応した生物である。人類の前に生まれて来たのは、菌類と動物で、その多くは地球の環境に不適応であったので、その発展過程において、次第にその種を消滅させていった。その中で消滅しなかったものは、依然として生まれたり消滅したりしながら持続的な発展段階にあり、人類のように天地の間での生存ではないが、広大な山谷や原野を飛び、高い峰や深い林を走りながら、種族の生命を引き継がせ、大自然の生死の交替を演繹させていった。

人類はこれら生命の中で最も適応能力を有する種類である。しかし地球的な視点で人類を見ると、人類も一種の菌類、動物に過ぎない。もしそうでなければ、あの蒙昧野蛮な原始民族は人類ではないと言えるのであろうか。その生存方式は菌類、動物と基本的には同じで、自然界の盲目的な運命の支配を受け入れ、彼らの全ては生命を包括し、天からの命を聞くのである。人類は一種の主体的存在として、大自然からの支配を盲目的に聞くことに甘んぜず、自身の命運を自身で掌握出来ることを望んだが、この種の主体的能動性の発揮も、自然の規律に違背することはできなかつた。人類が誕生する前、地球は即ち星雲が固体に発展進化し、動物、植物、鉱物を誕生させた。これは大地のもつ誕生の徳である。人類が誕生した後、親族、社会、国家が発生したが、それらの発生は、人類が積極的に自然界の規律に順応してきた優れた品德を表している。しかし、人類はどれくらいの程度で、自身の原始的動物性を克服し、独自の属性を獲得してきたのであろうか。中国は四千年の悠久の文明を有してきた。それは積極的に自然界に順応し獲得してきた成果である。しかし我々が自然界に存在して、自身は自然界の中の一分子であることを、果たして理解しているかどうか。地球上には高さ140里の山が、地表下には溶岩が、地表には種々の生物が、我々と共に地球上に生活している。就中、中国について言えば、ヒマラヤ、昆侖山の高さがあり、黄河、揚子江の水の深さがあり、南には美しい海があり、北には大沙漠があり、これが、我々とその他生物が共に生存している環境である。人類はいつも大地の徳に違背していないと自慢してきたが、人類の行為はどれだけの程度で、この点を行ってきたのであろうか。日本は小国ではあるが、ある人が『人生地理学』を著し、人は使命を負っているのに生命の意義を理解していないことを、また地球に責任を負っているのに科学の道理を理解しないことを咎めた。季路がどのように鬼神（訳者註、死者の霊）に仕えればよいかを尋ねた。先生は「生きている人間の手助けもできないのに、どうして死者の手助けが

できようか」と言われた。季路が「死とはなんでしょう」と尋ねた。先生は「まだ生もわからないのに、どうして死がわかるだろうか」と言われた。もし我が国の民衆が、季路のように現実の人間に関心がなければ、どうなることであろうか。白洋序。

## 「凡例」

『人生地理学』は、著者のもとのままの著作で、「最新」の2文字を前に付けたのは、それとそれ以前の別人の同類の著作とを区別するためである。実際の所、本書の中で述べているのは、人生と地球の関係の理ではなく、人生と地球の関係の情である。結局の所、理論も情から生まれてきたものに過ぎなく、地球は即ち人の父母のようなもので、地球と我々には親子のような感情がある。

著者は、本書の中で、日本を褒める時は必ず、琉球、台湾、高麗を褒める。このことは一応理解することが出来るが、中国に対して褒めることは、適切であるかどうか。訳者はこの点の一つの問題であると思っている。本書の中で、この類いの問題はまだある。例えば、琉球、台湾、高麗に対しても同様で、我々は敏感であるべきだ。

日本は一つの島国として、中国とは遥かに相い隔たり、その地域を総括すると粟米くらいの大さに過ぎない。しかし本書の中ではそれを大いにすらすらと語り、資料も極めて豊富で、貧弱さは見られない。著者は、日本の国土の様々な状況や様態を描き述べている。もしそうでなければ、中国は相対的に貧乏であることを表すことになる。今、読者の前にあるこの書は、私が著したものでなければ、編集したものでなく、翻訳したものである。他人の著した研究成果を使用したので、一人の中国人として、只々、恥ずかしい限りである。

本書の中の地図に対しては、訳者は如何なる変更も加えていないし、原状を保たせている。それは私自身、それに対し深い研究と考証を欠いているからで、一つの欠点である。本書の中の図は、もとのままを留め、地名と人名の翻訳に対してのみ、最近通用している訳を採用し、原文に対し融通をきかしているが、字音では大きな間違いはないと思う。私が出るのは、ここまでである。

以上の「序」「凡例」を通して、『人生地理学』への評価、態度を考えて見ると、「序」の中の「ある人が『人生地理学』を著し、人は使命を負っているのに生命の意義を理解していないことを、また地球に責任を負っているのに科学の道理を理解しないことを咎めた。」の部分では、その見解に賛同を示しているように思える。即ち「人生と地球の相関

の理への探究」に共感を覚えたのであろう。一方「凡例」の中で、むしろ「人生と地球の関係の情」を述べていると感想を述べたのは、『同書』が第8版のように「地理学総論」が論述されていなかったからかもしれない。更に「中国に対して褒めることは、適切であるかどうか」と述べたのは、現状はそうでないのに何故にと言う疑問があったのであろう。琉球、台湾、高麗は中国の領土という意識がある故に同様の感情を抱いたものとする。資料の豊富さ、日本の国土の描写には、高い評価を与えている。

「序」「凡例」に関して、鄒振環教授、冉毅教授の感想を整理すると次のようになる。即ち、特に「序」の文章は高い水準の文語体（中国語）で、国学に深い造型のある人物が書いたものと思われ、本文以下の翻訳の文体とは、大きく異なる。執筆した「白洋」は、世界語言文字研究会の編集責任者か、あるいは外部から招いた学者の可能性が高い。なお『人生地理学』は大著であったので訳者は数人存在していた可能性も考えられる。

## 「目次」

### 緒論

第1章 地と人との関係 第2章 観察の基点としての郷土

第3章 如何に周囲を観察すべきか

### 第1編 人類の生活処としての地

第4章 日月及び星 — 地上現象の総原因としての — 第5章 地球

第6章 島嶼 第7章 半島及び岬角 第8章 地峡

第9章 山嶽及び溪谷 第10章 平原 第11章 河川

第12章 湖沼 第13章 海洋 第14章 内海及び海峡

第15章 港湾 第16章 海岸

### 第2編 地人相関の媒介としての自然

第17章 無生物 第18章 大気 第19章 気候

第20章 植物 第21章 動物 第22章 人類

### 第3編 地球を舞台としての人類生活現象

第23章 社会 第24章 社会の分業生活地論

第25章 産業地論 上 第26章 産業地論 中

第27章 産業地論 下 第28章 国家地論

第29章 都会及村落地論 第30章 生存競争地論

第31章 文明地論

## 結 論

- 第32章 地理学の研究法    第33章 地理学の意義及範囲  
 第34章 地理学の予期し得べき効果

大幅に加第された『人生地理学』第8版（1908年10月）と比べると、「第4編 地理学総論」が「結論」となっていたり、第8版にはある「第33章 地理学の概念」「第34章 人生地理学の発達」「第35章 地理学の名称並びに人生地理学の科学的位置を論ず」がない。また第8版にはある「第3編 第30章 人情風俗地論」もない。従って、翻訳された内容は、第8版以前のものを底本にしていると思われる。

## 3-2. 同書出版の背景

同書の訳者は、「膠州湾（山東省にあると思われる）列車駅傍144号」にあった「世界語言文字研究会編集部」である。同会については明らかではないが、同会編集部が翻訳し、日本の印刷所「翔鸞社」で印刷・製本し、上海の「群益書局」から発行している。

日清戦争以後、最初の日本書漢訳は中国における日本語学習者によってなされたが、日本に来ていた留学生も、1900年頃には、日本書漢訳の実力がつき、日本書漢訳の団体をつくった。<sup>(11)</sup> その団体は、訳書彙編社である。戢翼翬、章宗祥等の初期留学生が中心となり、月刊誌『訳書彙編』を発行して西洋近代の政治、法律、経済、歴史、哲学に関する著作の系統的紹介にあたった。漢訳されたものはのちに単行本として刊行されている。

1902年には、その分家として陸世芬が中心となって教科書訳集社も創設され、主として日本の中等教科書の翻訳にあたった。<sup>(12)</sup> これらの訳者は、その多くが日本の各大学で学んでいた中国留学生である。彼らは自身の学んだ日本語や専門知識を生かして、中国国内で急を必要とする各科目の中学の教科書を翻訳編集していった。<sup>(13)</sup> 同年、楊度、黄興等の湖南留日学生が中心となって湖南編訳社が創設され、月刊誌『游学訳編』を発行し、単行本も刊行した。同雑誌の編集法は、従来のひたすら単行本を訳すやり方ではなく、新聞雑誌にのった論文をも選択して訳を掲載している。<sup>(14)</sup>

この頃になると、同郷の留学生が集まって留学生会館を発行所に各種の雑誌を出し始めている。『江蘇』、『浙江潮』、『湖北学生界』などがある。これらの内容は『游学訳編』より政治的である。1903年には、范迪吉等の訳で会文学社から『普通百科全書』100冊が出版された。これは当時の日本の中等教科書及び一般教養を、100冊選んで訳したもので、大変大きな影響をもたらした。1904年には、福建省の留学生によって閩学会ができて『閩学会叢書』を発行した。これらの訳書は一般の教養のために訳したのもあるが、また中国

国内の学校の教科書にあてるために訳されたものでもあった。「教科書」という語は、そもそも日本語から中国に入ったものである。大部分は日本で印刷されて、中国に送られた。

(15)

留学生が日本で翻訳出版したため、日本の印刷会社に印刷を依頼した。当時中国書物の印刷を引き受けた印刷所は、浅草の東京並木活版所・牛込神楽坂の翔鸞社・牛込市ヶ谷の秀英舎第一工場・神田の愛善社・秀光社などいろいろであったが、なかでも並木活版所は『訳書彙編』をはじめとしてもっとも多く留学生からの依頼をうけたようである。<sup>(16)</sup>『江蘇師範講義 地理 第7編』も『最新人生地理学』もこれらの印刷所から出版された。『人生地理学』中国語版は榎本邦信という印刷者から、1906年に浅草の東京並木活版所から、1907年に牛込神楽坂の翔鸞社から出版されたことになる。なお日本で印刷するようになり、中国の出版物が従来の片面印刷の袋綴りから、両面印刷の洋装本にかわった。この変化は中国にまで伝わり、文明書局・商務印書館・広智書局などは、しだいに旧装をあらためて洋装本にかえていったのである。だがこのように、中国で洋装本ができるようになったとしても、留学生が日本にいて翻訳する関係や、印刷技術水準などの関係から、そののちでも、日本の印刷所の手を借りることが流行した。<sup>(17)</sup>

中国近代の翻訳事業は19世紀半ばから始まる。1850年から1899年にかけて、漢訳された外国書は約567種類あるが、日本書からは86種類で15.1%に過ぎなかった。しかし20世紀初め、大量の留日学生が日本書の漢訳に取り組んだため、日本書からの漢訳の割合が急激に増えた。例えば1902年から1904年まで、漢訳された外国書は約533種類で、その中で日本書は約321種類で60.2%も占めた。香港の学者である譚汝謙の統計によると、1896年から1911年にかけて、日本書で漢訳されたものは、958種類にのぼるとある。しかし実際は更に多いと言われている。その内訳として多い順に、社会科学（政法）366種類、世界史地175種類、自然科学及び応用科学172種類、語文133種類等であった。これは清末の留日学生が、普通学（中学程度の諸学科）と憲政を主として求めていたことと符合する。世界史地の多さは、世界情勢を理解し外国の経験をモデルにし、民族覚醒を喚起する為であった。<sup>(18)</sup>

#### 4. 清末における『人生地理学』

『人生地理学』という名称ではなくて、『最新人生地理学』という名称で取り上げ、その書のもたらした影響の一端を論述した学術書が出版された。それは郭双林著『西洋思潮激動下の清末地理学』（原文『西潮激蕩下的晚清地理学』北京大学出版社2000年5月）である。

それによると、2つの点で注目している。1点目は、『最新人生地理学』が論述した郷土地理教育の理論と方法の、中国の郷土地理教育にもたらした影響である。即ち「地理学教育は昔からあるが、地理学教育を国民教育、愛国主義教育の一部分にしたのは、清末になってからである。(略)20世紀初頭の状況から見ると、(地理学教育に対し)当時影響が最大であったのは、中国の地理教育ではなく、また世界の地理教育でもなく、それは郷土地理教育であった。」<sup>(19)</sup>「当時東洋や西洋の郷土地理教育論の中国における伝播も、郷土地理教育思潮の更なる発展に対し、重大な影響を与えた。(略)当時訳された日本の地理学の著作、例えば1907年上海遊芸社再版の『最新人生地理学』も、程度は異なるが郷土地理教育の理論と方法を紹介した。」と。<sup>(20)</sup>

2点目は、『最新人生地理学』が論述した国家と個人の関係が、中国社会への民主思想学説伝播に一つの役割を果たしたという点である。即ち「各種の民主思想学説が一般地理学知識の中に融合させられた形で紹介された。(略)膠州湾世界語言文字研究会編集部訳述の『人生地理学』(1907年上海遊芸社再版)は、国家の職能と目的に論及した際に、国家は個人の自由活動を確保すること、即ち個人の権利を保護する職能を特に強調している。同書の中では『これ実に、近世に至りて文明国に明らかに認識せられたる国家活動の一つにして、法律に服従し秩序に注意するの薫陶を受け、これを経たる国民の独りうべきところのものなり。その方面に二あり。一は国民相互の間に生ずる妨害に対して、個人の権利を認め、その自由を保護するものにして、他は国家それ自身の発動機関たる政府の侵害に対して、個人の権利を認め、その自由をして神聖侵すべからざるものたらしむるのみならず、個人に対して、政治的権利(参政権)を保証し、かつ両者ともにその権利を行使し、また強行する方法を与うることこれなり。なかんずく、後者は実に最近の憲法の発布によりて、初めに確立したるところのものにして、良心の自由、思想の自由、言論の自由、宗教の自由、および政治、宗教、教育等の目的のためにする個人結社の認許等は、その主たるものなり。』とある。」と。<sup>(21)</sup>

他方、『最新人生地理学』の書物それ自体からも、果たした役割のいくらかが推測される。上海図書館の内1冊(再版本)には、「徐家滙天主堂蔵書樓印」という印鑑の跡がある。徐家滙天主堂とは19世紀に建てられた教会で、同天主堂付設の蔵書樓(図書館)には古い中国語の書籍もありその1冊として収蔵されていた。

また浙江省立図書館のものには、「章欽」「Chang Kin」「章厥生教授遺書捐贈浙江省立図書館」の印鑑の跡がある。更に「此語過火(この語は度を越えている)」「此数句意思重複(これらは意味が重複している)」等(あと3ヶ所あるが、解読が困難である。その内1ヶ所は文章の上に線を引き、好意からかよりよい翻訳を付しているとも読める。)の書

き込みがあり、更に最初から最後まで至る所に、「○」「△」の符合が付されかなり精読した跡も見られる。章嶽（1880～1931）氏の字は厥生であるので、同一人物であろう。章氏は1903年に科挙の試験に合格し、浙江高等学堂、浙江両級師範学校で教授を務め、1913年からは北京高等師範学校、北京大学、北京師範大学、南京東南大学で文学系、歴史系の主任を歴任した。著作に『歴史地理大辞典』『中華通史』『中国文化史』等がある。歴史学等の書籍は、遺族が浙江省立図書館に寄贈した。『歴史地理大辞典』の「凡例」に「本書は中外の各種図書700冊から800冊を資料とし、丹念に読み云々」<sup>(22)</sup>とある。『最新人生地理学』もその中の1冊かもしれない。

## 5. 結 び

『人生地理学』は、中国では以前使われたことがなく初めてその名称が登場したこと、清末の教育改革の中で留日学生が翻訳編集し、新式学校で教科書として使用したこと、論述した郷土教育理論と方法が清末の愛国主義教育にも適合したこと、民主思想の伝播にも一つの役割を果たしたこと、更には「人地の相関の理」を発見し明らかにしたこと等の要因により、かなりの影響をもたらしたと考えられる。

本稿「序」の部分で触れた凌庭輝の『人生地理学』は、郭双林論文により日本書の訳本であることが判明した。<sup>(23)</sup> 同書は1909年に出版され、全36章からなり、『総論』部分では、人生地理学の原理及びその研究方法を全面的に論述しているとなっている。筆者は以下の理由で、同書も牧口の『人生地理学』の系列の中にあるものと考え。同書出版前後、牧口以外の日本書の中で『人生地理学』という書はなかったと思われる。1908年に『人生地理学』第8版が出版され、従来の「結論」3章6節構成から、5章18節構成に大幅に増加されたことが、凌氏の注意を引いた。同書の一節「地理学を述べる者は、ただ一つ二つの地名や語標を覚え、或いは古跡を参考にし、その沿革を考察し、その形勢を推量する。(略) 人地の相関の理を発見し明らかにする際には、断じて旧来の見解に固執せず、空話を求めず、実用を求める。」<sup>(24)</sup> が、『江蘇師範講義 地理 第7編』の緒論の一節「地理学を研究する者はまた、ただ古籍を参考にし、一つ二つの地名の沿革をあらまし覚え、その形勢の険しいとか平坦を与える。(略) しかしながら地人の相関の理については、かつて発見され明らかにされた所がない。それは考証家の地理学なり。今日の所謂地理学者とは異なる。今日の所謂地理学は一種の実用の科学として大切である。」と類似している。凌氏は、浙江省湖州府の出身で、弘文学院で学び（記録によると8ヶ月の速成師範生として1902年6月から1903年1月まで在籍した）、帰国後1908年春より、浙江両級師範学堂で、同年7月からは浙江官立法政学堂にて、大清会典、歴史、地理、論理学を担当した。<sup>(25)</sup>

凌氏漢訳の『人生地理学』が牧口の系列にあるとすれば、清末に比較的影響があった概論的な人文地理学の著作3種類は、全て牧口の『人生地理学』ということになるが、この点の解明は今後の課題としたい。

(2002年2月11日 脱稿)

註

1. 鄒振環『晚清西方地理学在中国——以1815至1911年西方地理学訳著的伝播与影響為中心』上海古籍出版社2000年4月210～211頁。
2. 郭双林『西潮激蕩下的晚清地理学』北京大学出版社2000年5月123頁。
3. 蔭山雅博「宏文学院における中国人留学生教育の展開」齊藤秋男その他『教育の中の民族』明石書店1988年149頁。
4. 講堂館所蔵文書「宏文学院一覽」
5. 阿部洋『中国の近代教育と明治日本』福村出版1990年8月15～16頁。
6. 阿部洋『前掲』28～29頁。
7. 蔭山雅博「清末江蘇省の教育改革と日本人教習」『教育史学会紀要』第31号74～77頁。
8. 阿部洋『前掲』174～175頁。
9. 阿部洋『前掲』211～212頁、216頁。
10. 呂順長『清末浙江与日本』上海古籍出版社2001年8月117頁。
11. さねとうけいしゅう『中国人日本留学史』くろしお出版1970年259頁。
12. 阿部洋『前掲』108～109頁。
13. 王曉秋『近代中日文化交流史』中華書局2000年8月410頁。
14. さねとうけいしゅう『前掲』266頁。
15. さねとうけいしゅう『前掲』273～275頁。
16. さねとうけいしゅう『前掲』325頁。
17. さねとうけいしゅう『前掲』292頁、324頁。
18. 王曉秋『前掲』415～416頁。
19. 郭双林『前掲』181～182頁。
20. 郭双林『前掲』183～184頁。
21. 郭双林『前掲』218頁。なお和訳に際しては、聖教文庫136『人生地理学5』1997年5月15～16頁を参照した。
22. 章嶽『中華歴史地理大辞典』台北新文豊出版1974年10月、台湾版では書名に中華が付されている。
23. 郭双林『前掲』27頁。
24. 郭双林『前掲』27頁。
25. 王曉秋『前掲』116～118頁。